座談会

舞踊と小道具

郡司正勝・若松美黄・福田一平（兼司会）

（桜井勤氏による出席者の紹介あり）

福田　はじめに桜井先生の人柄を思わせるユーモアたっぷりの人物紹介で，この座談会に和やかな雰囲気をつくっていただきました。

今日のテーマは「舞踊と小道具」ですが，私共のダンスの発展過程で，その手にしてきた持ち物のもつ内的な要素などに，いろいろな経緯があると思われます。考えて見ますと私たちの毎日の生活の中にも小道具はいっぱいあるわけで，朝起きてから夜寝るまで皆さんも小道具に囲まれて生活しているようなものです。例えば私のこの眼鏡も，皆さんの前のコップもみな小道具ですね。そして桜井先生が先程お話しのマイクの使い方にも，さっき見ました映画の中の又五郎さんのお話しの持ち物の使い方も，いろいろな約束事がございます。

そうした私共の生活周辺のすべての持ち物の中から，今日は舞踊における小道具に焦点をしぼってお話しをすすめたいと思います。それでは歌舞伎や日本舞踊の権威でいらっしゃいます郡司先生からお話しをお伺いすることに致しましょう。

郡司　では私は勝手なことを申します。第一に皆さんも疑問に思われるかと思いますが，洋舞と日舞を比べるときに，洋舞では殆ど小道具を使わない。日舞になると道具を使う。これは先程花柳照奈先生や金井芙三枝先生の舞踊を見てお分りのことと思いますが，日舞は必ずものを持とうとするのです。日本ものをやろうとするとどうしてそうなるのか，外国のものでは物を持たないのか，これは大変おおきな問題だと思います。われわれにとって大きな宿題でございますのでみんなで考えていただきたいと思います。

私は日本舞踊の方から申し上げます。歌舞伎では先程の映画でご覧になったように小道具とは俳優さんは言いませんね。持ち物とこう言っています。これは大事なことです。つまり小道具という言葉は，日本では古い時代にはないのです。つまり大道具が出来たから，それに対して小道具という言葉になっている訳です。あの「双蝶々」の「八幡の切」の映画をご覧になって不思議に思われたとおもいますがあの引き窓は大道具ですね。しかし，それを開閉する網は小道具なのです。どうしてそうゆうことが起こってくるのか，それは日本の芸能の特殊性に係わる問題なのです。例えば「関の扉」という桜の精がでてくる常磐津の大曲がございますね。その場合，桜の幹は大道具，それを折って持つと小道具になるのです。同じ1本の木であって大道具と小道具になる。つまり持たれるものは小道具，手に触れないものは大道具なのです。ちゃんと区別があるのです。

それを遡って行きますとお神楽にまでいきついてしまいます。これは日本の芸能の根本的なものの考え方ですが，お神楽の場合，手に持つものを「採り物」と申します。いずれにしてもこれが小道具の出発点でございます。踊を助けるために小道具を持つのではないのです。日本人の考え方では小道具を持つと踊りだすのです。それが大事なところです。小道具に何かが移ってくる。それによって踊りだすのです。だから手に物を持たないと踊りだせないのです。最も日舞で儀式的なもので大切にされる「扇」というものがあります。これは特殊なもので，本来日常道具ではないのです。これはあおぐのですから，仰や力，神様を仰ぐ力なのです。儀式のものですね。しかど平安朝の時代でも「五節の舞」などで檜扇をかざしていますね，五節の舞の本質は巫女さんですから，扇をかざして神様を招くのです。そこに神様の依るもの，つまり神の依代が持ち物でございます。これは韓国の巫女舞のムーダンも同じです。

そしてその扇時代よりも，もっと古い時代にゆきますと，あめのうずめの命，これが日本の舞踊史では第1頁に出てくる踊りです。そのうずめの命が手に持っているのが笹なのですね。笹はさやさやと音がするので神がかりになる。その音が後に鈴の音になるのです。この笹は日本の舞踊の根元をなすもので，巫女さんが行う湯立ての舞などでは湯を笹で四方へかけます。これが湯だての舞です。

日本の舞踊では，狂乱ものがひとつのグループをなす程あり，舞踊といいますと狂乱だ，気違いだといってよろしいと思います。狂乱ものでは笹をかならずもちますのが原則です。これは精神病でなく，手にした笹につられて狂気になる，踊りを踊る状態になるということです。だから「保名」が笹をかついででて来るのです。狂女ものもそうです。それが変化していろいろなものになります。「お夏狂乱」は新しいものですから手洗いの奉納の手拭を持ってでてきます。本当に狂乱なら草鞋でも持って出てくるほうが，よほど狂気だと思いますがそうはいかないのです。かならず笹を持つ

姿を残してある訳です。

これは後に采配（幣）に変化してゆくのです。軍配になる以前は相撲でも采配を持ったのです。それは神の意志で勝敗を決めるという意で，相撲はスポーツでなく芸能と考えていいわけです。また江戸時代になってからは手拭をよく使います。これも古くさかのぼりますと平安時代の布（ひれ）です。中国の芝居でいう水袖，それを振って布の先に神様の魂を付着させるのです。皆さんも別れの時にハンカチを振るでしょう。あれと同じです。

もうひとつ傘があります。これも中国から入って来たものですが，高貴なものの上に傘をさしかけます。唐から入って来た神を迎える傘です。雨であろうと天気であろうと関係ありません。高貴なものの頭上にさしかけて神を迎えるのです。あるいは神の居所を示すのです。神楽などでは天蓋（てんがい）と呼ばれる蓋（がい）を舞台にかざし，その下に入いる巫女は神がかってくるのです。また芝居でも幽霊は傘の上に下ってくるのです。

韓国の巫女舞などはたくさん着物を重ねて着ますが，日本でも着ることにより神になるということがあります。その他静のように烏帽子をつけることによって舞う資格ができる。これと外国のものは全く反対で着てるものをぬぎ，タイツになり，手に持つものはみな捨てる。これは俗世界のものをできるだけ捨てて天国へ行く姿なのです。日本のものは向こうから神が来てくれる。つまり採り物に招れて来てくれるのです。西洋の神様は，こちらから天国へ行かなければならないので，現世の汚れたものを全部捨てて行かなければ神さまに近付けない。この辺で一応私の蓄は終りです。

福田　いろいろと日本舞踊に造詣の深い郡司先生ならではのお話しを伺いました。それでは洋舞の立場から外国にも留学なさり，多方面に活躍中の若松先生のお話しを伺うことにしましょう。

若松　物を持たないということですが，ギリシャの例でも手をつないでいるものが多いですね。踊っている人が手をつなぎ円形になって踊る。つまり手をつないでいるので物をもたない。これなどギリシャ以来の古彫刻などに残っていますが，同じヨーロッパと言ってもバスク地方は少し違って，いろいろな小道具を持って踊るものが多く見られます。それはともあれ洋舞は原則として小道具を持たない方がよいと教えられます。

私は自分の書いた本の中で提案として，小道具を活用しようじゃないか，振付はダンシングに頭を働かせようじゃないか，そして即興をもう少し効果的に織り込むことができるのではないかと小道具のことを言っているのですが，洋舞の立場から小道具の具体的な例をあげお話したいと思います。

ミュージカル映画のフレッド・アステアはステッキを足でけりあげたり，床を打ちタップを加えたりして，壁，柱と，いろいろな動作を小道具を活用して踊りを展開して行きます。ジーン・ケーリーの「雨に唄えば」は，雨を小道具に考えて，雨水のたまった帽子を振り払ったり，ぐしゃぐしゃに濡れてタップの変形を見せたりして楽しませます。これらミュージカルに表れた例は，1つの小道具を見立てて，つまりシンボルとして別なものに変えてしまうという働きを持っていると思われます。

その一番いい例がチューダーの作品にあります。チューダーという人は日本の見立ての芸能に影響を受け彼の芸術を完成させたと思います。「子供の情景」という作品は，長い布を1枚持ってきて男と女の子が電車ごっこやテント遊びなど，与えられた1枚の布を2重3重に使って情景を変化させます。また「パリスの審判」という作品では，美女選びの場面で，ホステス3人に小道具をあらゆる見立てとして使わせ踊らせています。こうしたチューダーの小道具の使い方は，僕らの与えられたジャンルの中でも必要だと思います。先ほどの映画の伝統的な小道具の使い方は，本当に勉強してないと扇1つ使うのもナンセンスになってしまうと思います。

だが簡単なのは1枚の新聞，ハンカチ，棒切れでも，50種類，60種類のイマジネーションが展開できます。モダンダンスは貧乏だから言う訳ではないが，持たざるという創作を展開して行くとき，あり過ぎた小道具が無駄だと思うことがあります。例えばピナ・バウシュが3000本のカーネーションを舞台にひいても，最初のうちはきれいだなと思うけど，しまいに踊り手の足元にひっくり返って，つぶれた花が可哀想で，何か見立てて変えてゆけるようなことを考えました。私の水を使った作品の中で，土方巽という友人と一緒に生活していてリハーサルをやってましたけど，水を飲むとか，空中にはき出し光をあてると虹ができるとか，新聞紙の衣裳が水に溶けてゆくとかやるうち，水を手で打つとぴしゃぴしゃはね，土方が喜んでそこから泳ぐ動きへ展開したことを思いだします。そうした道具立てを使い廻し，日本のモダンダンスをよその国に紹介できればと思います。

福田　お二人それぞれの立場から切り口を変えた有意義なお話しを伺いました。郡司先生の日本の伝統からの考察，若松先生の見立てという視点からのご意見，日本の文化論にまで発展できるのではないかと思われます。では次に現代の舞踊に見られる小道具の多重的な役割と，その将来についてお聞きしたいとおもいます。

若松　道具をもつ根拠のひとつは変化がつくことです。5体だけでのボキャブラリーはどんなに広げても限界があります。現在欧米を分けますと，

アメリカでは小道具を多用したポストモダンから，より抽象のムーヴメントに入り，ヨーロッパの方は持つ物に更に意味をなげこんで行く，そのより劇的な在り方は現在の主流になって来ていると思います。

郡司　先程見立ての問題が出ましたが，見立ては発想であって舞踊ではなく，見立てに行くまでの動きが舞踊なので，そこに問題があります。見立ては象徴をおびてくる。それが創造と結び付いて舞踊の原点になるのではと，少し単絡だが考えられると思います。

——ここで世界の小道具を用いた舞踊をスライドで映し，司会者の説明あり——

福田　もっといろいろなお話しをお聞きしたかったのですが，不慣れな司会ですみません。両先生有り難うございました。　　（文責　福田一平）

＊1993年度春季第35回舞踊学会
『舞踊學』第17号より転載